

2021年1月8日(金)

老球の細道585号

あきらめることなく牛歩で挑み続けよう

会津バスケットボール協会 室井 富仁

今まではたいした関心のなかった箱根駅伝だったが、今年はさすがに観てしまった。年末のウインターカップ同様、勝負は最後の最後までわからないということをつくづく思い知らされた。創価大アンカーにタスキが渡された時、駒沢大と圧倒的な時間差があったので、まさかここからは逆転は不可能だと思っていたが、「不可能」などやはりなかった。

人生には「三つの坂」があると結婚式などのスピーチで聞く。「上り坂、下り坂、まさか(坂)」である。箱根駅伝はまさにこの三つの坂を乗り越えなければならない。テレビ解説者が創価大の優勝は決定的で箱根駅伝の歴史が塗り替えられると語っていたが、その「まさか」が起こった。今まで何事もなく順調に走っていたランナーの表情が苦悶の表情に変化し、信じられないようなスピードダウン。そしてあっけなく逆転負け。年末のバスケットボール男子ウインターカップの決勝戦と同じような「まさか」であった。信じられないミス、信じられない失速。これも皆初優勝を意識したが故のプレッシャーが原因か。

駅伝もバスケットボールも最後に逆転したのは優勝経験豊富な伝統校であった。創価大はレース前の目標は3位入賞とマスコミに話していた。駒沢大学は先の全日本大学駅伝で優勝しているのでもちろん優勝を掲げていた。勝敗を決する重要な局面では「三つの場」が現れる。「正念場、土壇場、修羅場」。そのような時に力を発揮するのは「目標の高さ」か。

ところで、バスケットボールのみならず大学駅伝においても、有力校にはアフリカからの留学生がメンバー入りしている。特に大学駅伝はその先駆けたる歴史がある。1989年の山梨学院大学に留学したケニアのオツオリ選手を思い出す。彼が4年生の時山梨学院大は箱根駅伝初優勝した。当時は色々批判があったが、今やどんな競技でも留学生は世界基準を知るうえで欠かせない存在である。世界と戦うには留学生は絶好のライバルとなる。

高校バスケットにおいても、今や強豪校は外国人留学生はもちろん、全国から優秀な選手を集める。強くするには選手リクルートは常識だという風潮がある。リクルートができない公立高校チームはどうしたら良いのだろうか。勝つことをあきらめなければならないのか。

スポーツ界で最もリクルートが難しいチームの一つ東大野球部は昨シーズン六大学リーグ戦で連敗が56あったという。「選手は豊富な知識を持ち、科学的な練習で基礎体力も向上し、練習にも無駄がないが勝てない」と監督は言う。勝てない原因は選手のリクルートができないことである。受験の関門が高く推薦制度がない。しかし、このチームは敗れてもなおプライドを失わず、この「宿命」を言い訳にしない。東大の突破口はどこにあるのか。「妙案はない。細かい部分を一つ一つ積み重ねるしかない」と監督は言う。その通りである。

普通のチームで勝利を目指すには、自チームの不足部分を補いながら、あきらめることなく「三つの命」で一步一步チャレンジを継続するしかない。「運命」で出会ったチームで、リクルートできない「宿命」を背負い、それでも勝利の「使命」を果たす。